（第２回　午前）

2021（令和３）年度適性検査問題

適 性 検 査 Ⅰ

（実施時間：45 分）

《注　　意》

(1)　問題は 1 のみです。
(2)　解答はすべて解答用紙に書いてください。
(3)　受験番号、氏名を忘れずに書いてください。
(4)　解答用紙のみ回収します。

城 西 大 学 附 属
城　西　中　学　校

1　次の二つの文章を読み、あとの問に答えなさい。

A

勉強したい、と思う。すると、まず、学校へ行くことを考える。学校の生徒のことではない。いい年をした大人が、である。こどもの手が離れて主婦に時間ができた、もう一度勉強をやりなおしたい。ついては、大学の聴講生にしていただけないか、という相談をもって母校を訪れる。実際の行動には移さないまでも、そうしたいと思っている人はたくさんあるらしい。

家庭の主婦だけのことではない。新しいことをするのだったら、学校がいちばん。年齢、性別に関係なくそう考える。学ぶには、まず教えてくれる人が必要だ。これまでみんなそう思ってきた。学校は教える人と本を用意して待っている。そこへ行くのが正統的だ、となるのである。

たしかに、学校教育を受けた人たちは社会で求める知識をある程度身につけている。世の中に知識を必要とする職業が多くなるにつれて、学校が重視されるようになるのは当然であろう。

いまの社会は、つよい学校信仰ともいうべきものをもっている。全国の中学生の九十四パーセントまでが高校へ進学している。高校くらい出ておかなければ……と言う。

ところで、学校の生徒は、先生と教科書にひっぱられて勉強する。自学自習ということばこそあるけれども、独力で知識を得るのではない。いわばグライダーのようなものだ。自力では飛び上がることはできない。

グライダーと飛行機は遠くから見ると、似ている。空を飛ぶのも同じで、グライダーが音もなく優雅に滑空しているさまは、飛行機よりもむしろ美しいくらいだ。ただ、悲しいかな、自力で飛ぶことができない。

①学校はグライダー人間の訓練所である。②飛行機人間はつくらない。グライダーの練習に、エンジンのついた飛行機などがまじっていては迷惑する。危険だ。学校では、ひっぱられるままに、どこへでもついて行く従順さが尊重される。勝手に飛び上がったりするのは規律違反。たちまちチェックされる。やがてそれぞれにグライダーらしくなって卒業する。

優等生はグライダーとして優秀なのである。飛べそうではないか、ひとつ飛んでみろ、など

と言われても困る。指導するものがあってのグライダーである。

グライダーとしては一流である学生が、卒業間際になって論文を書くことになる。これはこれまでの勉強といささか勝手が違う。何でも自由に自分の好きなことを書いてみよ、というのが論文である。グライダーは途方にくれる。突如としてこれまでとまるで違ったことを要求されても、できるわけがない。グライダーとして優秀な学生ほどあわてる。

そういう学生が教師のところへ〝相談〟にくる。ろくに自分の考えもなしにやってきたってしかたがないではないか。教師に手とり足とりしてもらって書いても論文にはならない。そんなことを言って突っぱねる教師がいようものなら、グライダー学生は、あの先生はろくに指導もしてくれない、と［1］をとがらしてその［2］を鳴らすのである。

そして面倒見のいい先生のところへかけ込み、あれを読め、これを見よと入れ知恵してもらい、めでたくグライダー論文を作成する。卒業論文はそういうのが大部分と言っても過言ではあるまい。

いわゆる成績のいい学生ほど、この論文にてこずるようだ。言われた通りのことをするのは得意だが、自分で考えてテーマをもてと言われるのは苦手である。長年のグライダー訓練ではいつもかならず曳（ひ）いてくれるものがある。それになれると、自力飛行の力を失ってしまうのかもしれない。

もちろん例外はあるけれども、一般に、学校教育を受けた期間が長ければ長いほど、自力飛翔の能力は低下する。グライダーでうまく飛べるのに、危ない飛行機になりたくないのは当たり前であろう。

こどもというものは実に創造的である。たいていのこどもは労せずして詩人であり、小発明家である。ところが、学校で知識を与えられるにつれて、散文的になり、人まねがうまくなる。昔の芸術家が学校教育を警戒したのは、たんなる感情論ではなかったと思われる。飛行機を作ろうとしているのに、グライダー学校にいつまでもグズグズしていてはいけないのははっきりしている。

いまでも、プロ棋士（きし）たちの間に、中学校までが義務教育になっているのがじゃまだとはっきり言う人がいる。いちばん頭の発達の速い時期に、学校でグライダー訓練なんかさせられては

ものにならない、というのであるらしい。

人間には、グライダー能力と飛行機能力とがある。受動的に知識を得るのが前者、自分でものごとを発明、発見するのが後者である。両者はひとりの人間の中に同居している。グライダー能力をまったく欠いていては、基本的知識すら習得できない。何も知らないで、独力で飛ぼうとすれば、どんな事故になるかわからない。

しかし、現実には、グライダー能力が圧倒的で、飛行機能力はまるでなし、という〝優秀な〟人間がたくさんいることもたしかで、しかも、そういう人も〝翔べる〟という評価を受けているのである。

学校はグライダー人間をつくるには適しているが、飛行機人間を育てる努力はほんのすこしかしていない。学校教育が整備されてきたということは、ますますグライダー人間をふやす結果になった。お互いに似たようなグライダー人間になると、グライダーの欠点を忘れてしまう。知的、知的と言っていれば、翔んでいるように錯覚する。

われわれは、花を見て、枝葉を見ない。かりに枝葉は見ても、③幹には目を向けない。まして根のことは考えようともしない。とかく花という結果のみに目をうばわれて、根幹に思い及ばない。

（外山滋比古『思考の整理学』）

B

「国語は、ほかのどの教科と似ていると思うか」、高校に入学したばかりの一年生を前に、まずそう問いかける。これに対する反応で、その生徒が中学校まで国語をどのような教科と思って学んできたかが知れる。「社会」と答える者がいる。国語・社会は同じ「文系の科目」という先入観がそういわせることが多い。漢字や語句の意味などをたくさん覚えたという印象がそういわせることもある。「英語」と答える者もいる。日本語の学習も、英語の学習も、ともに語学の学習ではないかというわけである。むろん、すべてが間違っているということはない。「数学」、「理科」と答える者には、ほとんど出会わない。まれに「音楽」などという者もいる。理由を聞くと、「感じることを大切にするところと、表現するおもしろさがある点で似ている」

という。「文学」を中心に国語を考えてきたのかもしれない。

教師と生徒の関係をいえば、国語は実技教科に比較的近い。たとえば、「体育」。とび箱をとぶ授業で、教師はとび方を説明するかもしれない。どうやったらより高い箱をより美しくとぶことができるかと。あるいは、教師自らがとんでみせることもあろう。ハイレベルのとび方が生徒のため息を誘うこともある。しかし、その教師の説明や模範演技と、生徒がとべるかどうかということとは、直接的に結びついているわけではない。どんなにたくみな説明がなされても、それに対する生徒の理解がいかに正確であっても、あるいは、先生がこれ以上ないというとび方を披露しようとも、生徒本人がトライしてとぶということ以上の意味はない。やってみなければ上達は望めない。試行錯誤の中から、自らつかむものの価値を知らないで、上達していくということはないと思う。国語も同じである。教師の説明、教師のすぐれた読みなどは、ちょっとしたヒントといった程度のものである。それを記憶することよりは、それを生かして自ら読むということを大切にした方がよい。試行錯誤する者だけが手助けの意味を知っていくという構造がある。表現の場合も、事情は変わらない。また、この知的実技教科の場合も、体育と同じくいろいろな種目があるが、どの種目においても、④この基本は同じである。

（村上慎一『なぜ国語を学ぶのか』）

問一　――部①「学校はグライダー人間の訓練所である」とあるが、学校がどのような場所であると考えられているからか。解答らんにあう形で文中から八字で抜き出して答えなさい。

問二　――部②「飛行機人間」とあるが、どのような力を持った人間ですか。文中から十五字で抜き出して答えなさい。

問三　[1]、[2]にあてはまる言葉をとして正しいものを、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1　ア、目　イ、耳　ウ、鼻　エ、口

2　ア、不　イ、非　ウ、無　エ、未

問四　――部③「幹」とあるが、何をたとえたものですか。考えて答えなさい。

問五　――部④「この基本」とあるが、どのようにすることですか。二十字以内で説明しなさい。

問六　あなたはこれからの学校生活で国語という科目を学びながらどのように過ごしていきたいと考えますか。具体的な例をあげながら四〇〇字以内で述べなさい。

〔きまり〕

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落（だんらく）の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。（ますめの下に書いてもかまいません。）

○。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、。」で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。